

---

目 次

---

『モモ』を読む (第 1 回)

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 第 1 章 産業資本の本性  | 第 2 章 社会は変えられるか |
| 第 3 章 社会的引きこもり | 第 4 章 モモのイメージ   |
| 第 5 章 意識の跳躍    | 第 6 章 社会有機体     |
| 第 7 章 子安美智子の解釈 |                 |

後 記

---

編集人 境 毅  
連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号  
貿易研究会

ホームページのURL <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>  
Eメールアドレス KYW04500@nifty.ne.jp

会 費 正 会 員 : 年間 1口 10万円  
賛助会員 : 年間 1口 3万円  
購読会員 : 年間 1口 1万円

会費振込先 (郵便振替) (口座名) 資本論研究会  
(口座番号) 01090-5-67283

# 『モモ』を読む

## はじめに

エンデの『モモ』は、1973年に出版されました。日本語版が出たのは1976年のことです。私たちの子供時代には出ていなかったもので、読んだことがあるとしたら、自分の子供に買ってあげた場合でしょう。90年代になると、『モモ』は子供に買ってあげる本の定番になっていて、私も子供に与える前にまず自分で読んでみました。

一読して、この本は資本主義を克服する社会革命のメッセージを発していることに気づき印象に残っていましたので、2000年2月に出版された『エンデの遺言』(NHK出版)で、エンデが根源からお金を問い、金融システムを批判していることを知った時にも驚きませんでした。ただ、この本もそうですが、エンデを日本に紹介する人たちのなかにも、シュタイナーとのかかわりでエンデを読もうとする傾向があり、これには違和感を感じていました。

もう一度『モモ』を読もうと思ったのはそのあとです。京都で若い人たちから LETS をやらないか、という提案があったり、また、協同組合運動研究会での商品・貨幣についての術語集作成の必要上から『モモ』を取り上げることになったりで、『モモ』を中心に、エンデを研究してみました。

晩年のエンデの考えは、資本主義体制下の金融システムの批判に向っていたことが、『エンデの遺言』から読み取れます。しかし、『モモ』に金融システムや利子の批判があるとはいえないし、また、シュタイナー流の内世界での修行の必要性が提案されているとも思えません。私の印象では、『モモ』の時間どろぼうは資本のことであり、産業資本の本性について非常に上手に描いている、というものでしたから、この点について触れようとしないう解説本のたぐいには、大いに不満でした。

『モモ』ミヒャエル・エンデ作 大島かおり訳  
岩波書店

## 第1章 産業資本の本性

### 1) 見えない人々

『モモ』の物語に最初に灰色の男たちが登場する場面を見てみましょう。

「彼らはすがたが見えないというわけではありません。ちゃんと見えるのです。……ところがだれも彼らに気がつかないのです。彼らは気味のわるいことに、人目をひかない方法をこころえているため、ひとびとは彼らを見過ごしてしまうか、見てもすぐにわすれてしまうかです。ですから彼らは、すがたをかぐさないでいるためにかえってうまく秘密の仕事ができます。」(54頁)

エンデはさし当っては、灰色の男を独立した人格であるかのように描いています。ところが、灰色の男を人間として見たときに、姿は見えるけれども人々は気づきません。だから、彼らがどんな仕事をしているかについては誰も問おうとはしません。これは不思議な存在です。では、彼らが人間に内緒にしている秘密の仕事とは、どのようなものでしょうか。

「彼らは人間の時間にたいして、ある計画をくわだてました。大々的な、慎重にねりあげられた計画です。彼らがいちばん気をつけていたことは、じぶんたちの行動をだれにも気づかせないようにすることでした。灰色の男たちは目立たないように大都会の人々のくらしの中でのびこんでいました。そして一步一步、だれにも気づかれずに、日ごとにふかくいこんで、人間の財産に手をのぼしていました。

彼らは、じぶんたちのもくろみにかないような人間のことは、あいてがそれと気がつくずっと前から、すっかり調べ上げていました。そしてその人間をつかまえる潮どきを待つのです。

その時間がおとずれるようにくふうもこらします。」(76頁)

人間の姿をしていながら、誰にも気づかれずに、じぶんたちのもくろみにかないような人間をつかまえる。このような灰色の男たちの仕事ぶりは、床屋のフージー氏の場合を例にして説明されています。時間を節約して時間貯蓄銀行に預けておけば利子がついて返ってくるという殺し文句でフージー氏を納得させた灰色の男は、契約書は署名は、と問うフージー氏に対して、次のように回答しました。

「なんでそんなものがあるんです？時間貯蓄は、他のどんな種類の貯蓄ともまるっきりちがうんですよ。それは、完全な信頼の上になりたっています……双方の信頼に！わたくしどもは、あなたの同意のことばがあれば、それで充分です。そのことばは、取り消せません。そしてわたくしどもは、あなたがちゃんと節約するかどうかを気にしています。でも、どのくらい節約するかは、あなたにまかせます。強制なぞしませんよ。」(90頁)

何故、契約書が不必要なのでしょう。何故、時間の節約を強制しないのでしょうか。契約書をつくったり、節約を強制したりすれば、人間に気づかれてしまいます。人間に気づかれずに、このような配慮がなされているとすれば、では、灰色の男たちは、どのようにして人間に時間を節約させることができるのでしょうか。その謎は、次のように述べられています。

「けむりが消えるにつれて、鏡に書かれた数字もぼやけてきました。そして、完全に見えなくなったときには、フージー氏の頭の中から灰色の訪問者の記憶もすっかり消えていました。でもわすれたのは灰色の紳士のことだけで、そのときのとりきめのことではありません。そちらのほうは、いまではじぶんひとりできめた決定のように思えました。将来いつか、いまとはちがった人生を始められるように、いまから時間をためておこうという決心は、けっして抜けない鉤針のように彼の心にしっかりとくこんでいました。」(90頁)

なるほど、フージー氏にとって、灰色の男と

の契約は、灰色の男のことを忘れてしまうことで、何と、自分の自発的な決意と思込まされてしまっています。これなら契約書も不必要だし、強制もいりません。ところがフージー氏にとって自発的な決意と思わされている時間の節約は、それを実行すると、フージー氏を不自由にしてしまいます。

「彼はだんだんとおこりっぽい、落ち着きのないう人になってきました。というのは、ひとつ、ふにおちないことがあるからです。彼が節約した時間は、じっさい彼の手もとにひとつも残りませんでした。魔法のようにあとかたもなく消えてなくなっていくのです。」(91頁)

灰色の男たちの計画は、このように、人々の不安や欲望に付け入って時間を節約する、という決意をさせることでした。そして節約された時間は、人々に返ってきて人々を自由にするのではなく、逆に、人々から奪われて人々を不自由にするのでした。

「仕事が楽しいとか、仕事への愛情をもって働いているか、などということは、問題ではなくなりました……むしろ、そんな考えは仕事のさまたげになります。だいたいなことはただひとつ、できるだけ短時間に、できるだけたくさん仕事をすることです。」(94頁)

資本主義の発展によって形成された産業社会で働いている人たちの状況が、ここで描かれています。とすれば、灰色の男たち、時間どろぼうとは、資本をイメージして描かれた像なのでしょう。

## 2) 子供たちの闘いと灰色の男の正体

産業社会の成立による時間の節約、これが問題であると気づいたのは子供たちだ、とエンデは述べています。子供と遊んでくれる大人がもういなくなりました。時間を節約することで生活の中身が貧しくなっていました。「時間とは、すなわち生活(いのち)なのです。そして生活(いのち)とは、人間の心の中にあるものなのです。人間が時間を節約すればするほど、生活(いのち)はやせほそって、なくなってしまうのです。」(95頁)これがエンデのメッセー

ジでした。このメッセージを受けて、子供たちが登場し、灰色の男たちとの闘いに立ちあがります。

そのあらすじは次のようになっています。モモのところに来る子供たちがどんどん増えてきました。毎日何人かの新しい子供がきますが、みんな遊び方を知らず、高価なおもちゃをもってきたりしています。ある日、ジジが、子供たちにどうしてここに来るのか聞いてみました。すると子供たちは、父母が忙しくなって、かまってくれなくなったと述べたのでした。そこでモモはもうずっと来なくなっていた昔の知り合いの大人たちをたずねて話を聞いてまわりました。大人たちは皆、またモモのところに来ると約束し、実際何人かはモモのところに来ようになりました。ところが、このモモの行動が、時間どろぼうにとっては許し難いものとなったのです。というのも、モモとつきあうことで時間の節約をネグレクトする大人が出るようになったからです。

そこで灰色の男の一人がモモに人形を与え、人形と遊ぶように仕向けようとなりました。灰色の男はこんなにたくさんの人形があればもう友達なんかいらないうだろうと話しかけてきます。そのときモモは人形がお話したときと同じように「話す声は聞こえるし、ことばは聞こえるのですが、話す人の心は聞こえてこない」(124頁)ことがわかりました。

灰色の男の話を書く、これはモモにとって初めての経験でした。「ほかの人の場合には、モモはいわば相手の中にすっかり入り込んで、そのひとの考えや、その人のほんとうの心を理解することができました。けれどもこの訪問者があいてでは、それがまるきりできません。いくらつとめてみても、からっぽの闇のなかに落ち込んでいくような感じで、あいてがないのもどうぜんです。」(126頁)

灰色の男の、成功せよ、金持ちになれ、友達が好きなら時間を節約しようという努力を励ますべきだ、しかし、お前は、そのじゃまをしている、といった話を聞きながら、ついにモモは彼の内心のほんとうの声を聞き出しました。

『われわれは正体をかくしておかなくてはならないんだ。』と、遠くからひびくように声が聞こえます。『われわれがいることも、していることも、だれにも知られてはいけない……われわれはどんな人間の記憶にも残らないように気をつけている……知られないでいるあいだしか、仕事ができない……むずかしい仕事だ。人間から生きる時間を1時間、1分、1秒とむしり取るんだからな……人間が節約した時間は、人間の手には残らない……われわれがうばってしまうのだ……貯めておいて、こっちのために使うのだ……われわれは時間に飢えている……ああ、きみたち人間ときたら、じぶんたちの時間のなんたるかを知らない！……だが、われわれは知っていて、きみたちの時間をとことんまでしゃぶりつくすのだ……それも、もっとたくさん要るようになる……もっともっとだ……われわれの数がふえているからだ……もっとたくさん……』(129頁)

灰色の男の内心のほんとうの声を聞いたモモは、友だちジジとベッポに、一部始終を話しました。ジジは灰色の男たちの正体を皆にあばき、やっつけてしまおうと考えて色々提案をしますが、結局子供たちを集めることになりました。

次の日の子供の集会で、ジジは、灰色の男たちを大人たちに知らせる説明集会を呼びかけるデモ行進を提案しました。灰色の男たちの秘密を大人たちが知ってしまったら、人間の時間を盗めなくなるというわけです。

子供たちは実際にデモ行進をしましたが、しかし予定した説明集会には、大人は誰も来ませんでした。子供の闘いは失敗しました。子供の闘いは、大人がデモ行進に気づかなかったことで実を結びませんでした。灰色の男たちにとって、その秘密が子供たちに知られてしまったことは、とり返しつかないことでした。ただちにモモを探し出して必要な手を打つことが試みられますが、しかし、モモは、カシオペイアの導きで時間の国に脱出してしまいます。それで灰色の男たちは協議し、モモから友達と子供を奪って、モモが時間を与えられる人を取り上

げモモを孤独にすることでモモを困らせ、モモに時間の国への道案内をさせるための取り引きにもちこむことにして、帰ってくるモモにそなえました。

### 3) 灰色の男による意志支配

モモが灰色の男の内心のほんとうの声を聞くことが出来たのは、彼らのうわべの話を信じず、それと闘ったからでした。子供たちがモモの話に納得したのも、大人が、時間を節約することで子供に時間を与えなくなっていたからでした。でも、子供のデモ行進とアピールは、何故、大人に届かなかったのでしょうか。

その一つの理由は、大人たちが灰色の男たちにそそのかされて契約した時間の儉約が、自分の自発的な決意と思込まされていることにある事は言うまでもありません。大人たちの場合、灰色の男の話を信じてしまったので、それがあたかも自身の自発的な決意であるかのように思い込んでしまったのですが、それを疑ったモモは、灰色の男の「話す声は聞こえるし、ことばは聞こえるのですが、話すひとの心は聞こえてこない」(124頁)ことを知ったのです。

モモはここで灰色の男が人間の心をもたず、普通の人間ではないことに気づきました。しかしこの人間でないものが声を出し、そしてそのことばの意味が人間にわかってしまいます。資本が、増殖しよう、お金を儲けよう、という声を出し、その意味を理解した人間は、このお金もうけという決意が、自分自身の自発的な意志だと考えざるをえないのです。

人間でないもの、資本や貨幣や商品が、人間にわかる言葉を発信できるということになりますと、この言葉を聞いた人間は、物が言葉をもつはずはないと考えて、それを自分の言葉だと思ってしまう。人間以外のものに人間の意志が支配されている、モモはこのことを見抜いたのでした。

この限りでは、灰色の男は、人の時間を盗むという正体をかくしておく必要はありません。何故なら、人間には、資本が灰色の男という人間の姿をとったものとしては捉えられないから

です。逆に、人間でないものが人間として現われているということが、本当の意味での資本の正体とは言えないでしょうか。エンデの物語は、資本を灰色の男という人格として登場させ、その男の「話す声は聞こえるし、ことばは聞こえるのですが、話すひとの心は聞こえてこない」(124頁)そのような人格として、人間でないものが話しをし人間の意志を支配する、物象化の様式の正体を描いたことに、その意義を求めべきだと思います。

次に、正体を隠しておくということが、本当に上手なことです。資本は、人間でないものが人間として現われているが、人間の眼には単なる物にしか見えません。お金自身に購買力があり、人間を支配する力をもっています。このお金の物神性が、資本の正体を見えなくしてしまっているのです。だから灰色の男の内心のほんとうの声にある「人間から生きる時間を1時間、1分、1秒とむしりとる」ということも、どのような事態なのか全然わかりません。

### 4) 灰色の男たちの生き方

灰色の男たちのほんとうの正体を明かしてくれるのは、マイスター・ホラです。時間の国に住み、人間に時間を配分することに関与している時間の精は、時間のことに詳しい時間博士です。ホラは灰色の男たちの秘密についてモモに語ります。

『死んだもので、いのちをつないでいるからだよ。おまえも知っているだろう。彼らは人間の時間を盗んで生きている。しかしこの時間は、ほんとうの持ち主から切り離されると文字通り死んでしまうのだ。人間というものは、ひとりひとりがそれぞれ自分の時間を持っている。そしてこの時間は、ほんとうに自分のものであるあいだだけ、生きて時間であられるのだよ。』

『じゃあ灰色の男は、人間じゃないの?』

『いや、ちがう。彼らは人間のすがたをしているだけだ。』

『でもそれじゃ、いったいなんなの?』

『ほんとうはいないはずのものだ。』

『どうしているようになったの?』

『人間がそういうものの発生をゆるす条件を作り出しているからだ。それに乗じて彼らは生まれてきた。そしてこんどは、人間は彼らに支配させるすきまで与えている。それだけで、彼らはもうまと支配権をにぎれるようになるのだ。』

『もし時間をぬすむことができなくなったら、どうなるの?』

『そしたら、もとの無に帰って、消滅してしまう。』(201~202頁)

資本は過去の労働であり、死んだ、対象化された労働です。これに対して、生きた労働は、労働者の生命活動を離れては存在しません。生きた労働は、労働者の身体からはなれると、生産物に対象化されます。この対象化された労働、つまり死んだものでいのちをつないでいるものが資本なのです。

生産物は過去の労働、対象化された労働、死んだ労働に生きた労働が結びつくことで、生成されます。死んだ労働は、生きた労働が活動する前提条件です。ここでは、生きた労働が過程の主人公です。ところが、死んだものでいのちをつなぐ資本を人間が発生させてしまいました。資本は死んだ労働を増殖させることを目的に、生きた労働を支配します。そのおきては時間の節約です。もし資本が生きた労働を支配出来ず、したがって時間を盗むことが出来なければ、資本は資本たりえず、無に帰って消滅してしまいます。

人間から生きる時間を盗みとることが出来るのは、このように、灰色の男たちが死んだものでいのちをつないでいるからでした。死んだもので生きるためには、生きた時間で死んだ時間を増やしていく他ありません。あるいは、死んだ時間が生きた時間を盗んで増殖していくことが、灰色の男たちにとっては生きることなのです。

生きた時間をいけにえにして増殖していく死んだ時間、エンデはこの資本の秘密を明かすと同時に、資本が人間に聞き取れる言葉を発することで人間の意志を支配していることを示しています。そして、資本が、そのような人格的な

ものとして現われつつも、人間の方は、資本による意志支配を自発的な決断であるかのように思い込んでしまう、物象化の様式を描き出しているのです。

## 第2章 社会は変えられるか

### 1) 物語の終幕

物語では、灰色の男たちの支配に対して、大人たちは闘うことが出来ませんでした。他方、モモは、時間の国でホラから灰色の男たちの正体を教えられ、力を得て帰ってきました。その力の源泉は、時間の花について知ったことで、宇宙のあらゆる事物が言葉をもって語りかけていることを受け止められるようになったことにあります。灰色の男たちの声だけでなく、ありとあらゆるものの声を聞くことで、灰色の男たちの言葉のまやかさを理解できるのです。

ところが帰ってきたモモは、灰色の男たちのたくらみによって、友達を奪われ、たった一人でした。モモはニノヤジジを尋ねてみましたが1年間の時間は決定的でした。もう誰も、モモのところに尋ねてきません。モモはほんとうに孤独になり、時間の山にうずもれてしまいました。困ってしまったモモに、灰色の男たちが取引を持ち掛けます。モモは迷いましたが、結局は灰色の男たちの話を聞くことにしました。

灰色の男たちの提案は、ホラのところに案内してほしい、ということでした。ホラに会って、ぜんぶの人間の時間をそっくりまとめてもらうよう交渉する、というのです。人間なんてもうとくに要らない生き物になっている、この世界を人間の住む余地もないようにしてしまったのは人間だから、今度は、われわれ灰色の男が世界を支配するのだ、というのです。

でもモモは、一人では時間の国への道はわかりません。カメのカシオペイアとは、はぐれてしまっているのです。しかもこんな取引は断る他ありません。それで灰色の男たちはカメを探しはじめます。

しかし、カメは、モモの目の前にいました。

そしてホラのところに行こうとモモを誘います。モモは、すこし迷いましたがカメに従うことにしました。カメについて時間の国に向うモモを、灰色の男たちは追跡することにしました。こうしてモモは、そうと知らずに大勢の灰色の男たちを連れて、時間の国にたどりついたのです。

もちろん灰色の男たちは時間の国には入れません。でもしっかりと時間の国を包囲してしまいました。そしてホラに圧力をかけるべく、灰色のけむりで時間の国をつつみこもうとしています。

こうなることを考えていなかったホラは、モモとの話の中で灰色の男たちをやっつける方法を考えつきます。それは、時間を止めている間に、1時間の時間の花をモモに与え、そして、灰色の男の時間貯蔵庫をさがして、彼らが時間を取り出せないようにし、灰色の男たちを一人残らず消してしまってから、盗まれた時間を解放する、という大仕事をたくしたのです。モモはカシオペアの協力を得て、見事にこの大仕事をはたし、世界は昔のゆっくりとした豊かな時間を取り戻します。

## 2) モモは敗北していた。

時間を止める、というのは、恐らくゼネストのイメージでしょう。ゼネストが起きた時に、資本家どうしが内輪もめをし自滅していく、という段取りが読み取れます。あるいは、68年のフランス五月革命と重なり合っているかも知れません。

しかし、現時点から振り返ってみれば、ホラとモモは、物語とは別に、灰色の男たちに敗北してしまっただけではないでしょうか。現実にはモモは、時間貯蔵庫の扉を閉じてしまったあとの灰色の男たちとの闘いで、時間の花を奪われてしまったのです。灰色の男たちは、モモから奪った時間の花で貯蔵庫の扉を開けた後、たくさんの葉巻を補給して、時間の国へと向いました。時間が止まっていますので「さかさま小路」も問題ではありません。彼らは時間の国に到着すると、ホラをたたき起こし、人間の時間をそっくりよこすよう要求したのです。さすがの

ホラもどうしようもありません。

以降、人間は、自分の時間を灰色の男たちから借りなければならなくなりました。ホラが人間の時間をそっくり灰色の男たちに渡してしまったため、人々は、自分の時間を失い、自分のいのちも、灰色の男たちから時間を借りることでもかろうじてつなぐことができたのです。

灰色の男たちも、死んだ時間を増やさなければ生きていけません。死んだ時間は、生きた時間と結びつかなければ増えてはいきません。灰色の男たちが人間に時間を貸すのも、死んだ時間を増やす方法でした。時間を借りた人間は、働いて死んだ時間を増やすだけでなく、灰色の男たちに利子まで払わなければならなくなったのです。

ホラが起きた時、モモも灰色の男たちの時間貯蔵庫の前で目をさました。心配そうにカシオペアがモモを見ている。灰色の男たちは、モモにも時間を借りよう話かけてきました。人間の時間は全て、われわれのものとなった。生きようと思えば時間を借りるしかないのだ、と。モモが困ってカシオペアを見ると、そこには「ジキュウセヨ」という文字が浮かんでいます。モモは、灰色の男たちの申し出を断り、円形劇場に帰って、土を耕し始めました。間もなく、何人かの仲間がやってきて、小さな村が出来ました。

## 3) 新たなイメージにむけて

灰色の男たちを消滅させる方法はいくつかありました。一つは、ジジが計画した説明集会でした。灰色の男たちの正体を知った人たちが他の人々に訴えかけていく、これは伝統的な政治運動の手法をイメージしています。

もう一つは、ホラがモモと組んで、時間を止めヒーローに託すやり方です。でも、これはファンタジーの世界で成立するだけで、現実には、モモは敗北したのです。

そこで残された道は、人間が解決するしかありません。「わたしはいままで、人間が自分の力でこの悪霊どもの手から逃れるようになるのを待っていた。その気になればできたはずだ。

とにかくやつらの生まれてくるのを助けたのは人間自身なのだから。」(32頁)とホラが語っているように、人間がその気にならねばなりません。

モモが、カシオペアの導きで進んだ道は、現時点での人間のその気の一つの現われとして意義を持つでしょう。けれどもこれは別の物語、いつかまた別のときに話すことにしよう。

## 第3章 社会的引きこもり

### 1) かまってくれない子供たち

都会で灰色の男たちの影響が大きくなると、まず大人が、モモのところに来なくなりました。そして、子供が増え始めたのです。新しく来る子供たちは、まるつきり遊心というものがなくて、面白くもないといった顔で退屈そうにすわっています。ときには、皆の遊びをじゃますることもあります。また、子供たちは、いろんな高価なおもちゃを持ってくるようになりました。このようなおもちゃは、すっかり完成されていて、子供が空想を働かす余地がまったくありません。

これまでとは違う変な子供たちが大勢現われることで、モモやジジやペッポは心配になりました。そこでジジは、自分が話をする代わりに皆の話を聞くことにしました。

子供たちは、両親が、おもちゃを買ってくれたり、お小使いを沢山くれるようになったけれども、忙しくしていかまってくれなくなったと言います。両親は、子供たちを大事に思っているが、忙しすぎて何も出来ないのだ、というわけです。しかし、この話の途中で突然泣き出す子がいました。みんなにはその子の気持ちがよくわかりました。みんな同じように泣きたい気持ちでした。というのも、だれもが、見はなされた子供だと感じていたのです。

### 2) ビビガール

灰色の男たちがモモに与えようとした「ビビガール、完全無欠なお人形」は、人形と化して

しまった現代社会の消費者の姿を映しています。「あたし、もっといろいろなものがほしいわ。」灰色の男は、人形のために沢山の洋服を取り出してきます。次は、バッグ、コンパクト、テニスのラケット、テレビ、プレスレット、イヤリング……「つぎからつぎといろいろなものを買ってくれれば、たいくつなんてしないですむんだ。」と男はモモに言葉をかけてきます。こんなステキなものが次々に買えれば「もう友だちなんかいらなくなるだろう？」というわけです。

モモが、人形よりも友だちの方が好きだというと、男はお説教を始めます。

『人生でだいじなことはひとつしかない。』と男はつぶやきました。『それは、なにか成功すること、ひとかどのものになること、たくさんものを手に入れることだ。ほかの人より成功し、偉くなり、金持ちになった人間には、そのほかのもの——友情だの、愛だの、名誉だの、そんなものはなんにもかも、ひとりでに集まってくるものだ。』(126頁)

モモは、このお説教を信じませんでした。逆に疑って、灰色の男の本心を聞き出そうとし、そしてそれに成功したのです。

### 2) 子供の家

灰色の男たちの本性を知ってしまった子供たちは、モモが居ない間もずっと、円形劇場で遊んでいました。この子供たちには、灰色の男たちも、直接に手だしはできません。というのも、子供たちは、働かなくてもよかったからです。そこで、男たちは、大人を利用して、大人に子供を管理してもらうようにしました。

『放置された子どもというのは』と、またべつの方が声をあげました。『道徳的に墮落し、非行に走るようになります。市当局は、こういう子どもが野放しにならないよう、対策を講ずるべきです。施設をつくって、そこで、子どもたちを社会の役に立つ有能な一員に教育するようにしなくてははいけませんね。』

また別の人は、こう主張しました。

『子どもは、未来の人的資源だ。これからはジェット機と電子頭脳の時代になる。こういう

機械を器用に使いこなせるようにするには、大量の専門技術者や専門労働者が必要です。ところが、われわれは、子どもたちをあすのこういう世界のために教育するどころか、あいもかわらず、彼らの貴重な時間のほとんどを、役にも立たない遊びに消費させるようにしている。このようなことは、われわれの文明にとって恥辱だし、未来の人類に対する犯罪ですぞ!』

こういう声をきいて、時間貯蓄家たちは、目の覚める思いがしました。そしてそのころにはもう、大都会にはすごく沢山の時間貯蓄家たちがいましたから、この人たちの説得は短時間のうちに効をそうして、市当局は、大勢の放置された子どものためになにかする必要を認めるにいたりました。」(246~24頁)

こうして、各地域ごとにつくられた子供の家に、モモの友達も別々にほうり込まれました。

「しだいに子供たちは、小さな時間貯蓄家といった顔つきになってきました。やれと命じられたことを、いやいやしながら、おもしろくもなさそうに、ふくれつつらでやります。そして、じぶんたちの好きなようにしていいと言われると、今度は何をしたいのか、ぜんぜんわからないのです。

たったひとつだけ、子どもたちがまだやれたことはといえば、さわぐことでした。——でもそれはもちろん、ほがらかにはしゃぐのではなく、腹立ち紛れの、とげとげしいさわぎでした。」(258頁)

こうして、現代の子供たちがつくられていきます。

#### 4) 致死的退屈症

物語では、モモが灰色の男たちをやっつけたことになっています。しかし、真実は逆でした。灰色の男たちがホラと話しをつけ、人間の時間をそっくり受け取るようになってしまったのです。以前に、ホラは、時間の国が包囲され、灰色の男のけむりにまかれてしまったときに、それが人間にひどい害を与えると述べていました。その言葉を思い出してみましょう。

『けれどもこのくろいけむりがすっぽりこの

家をつつんでしまったら、わたしが送り出す時間にはどれも、灰色の男たちの死んだいやらしい時間がすこしまじってしまうようになる。人間はそんな時間をうけとったら病気になる。それも死ぬほどひどい病気になるのだ。』

モモは、ぼうぜんとマイスター・ホラを見つめて、ひくい声で言いました。

『それは、どういう病気なの?』

『はじめのうちは気のつかないけどだが、ある日、きゅうになにもする気がなくなってしまふ。なにについても関心がもてなくなり、なにをしてもおもしろくない。だが、この無気力はそのうちに消えるどころか、すこしづつはげしくなっていく。日ごとに、週をかさねるごとに、ひどくなるのだ。病気はますますゆううつになり、心の中はますますからっぽになり、じぶんにたいしても、世の中になんかたいしても不満がついてくる。そのうちに、こういう感情さえなくなって、およそなにも感じなくなってしまふ。何もかも灰色で、どうでもよくなり、世の中はすっかりとおのいてしまつて、じぶんとはなんのかかわりもないと思えてくる。怒ることもなければ、感激することもなく、よろこぶことも悲しむこともできなくなり、笑うことも泣くことも忘れてしまふ。そうすると心の中はひえきって、もう人も物もいっさい愛することができない。ここまでくると、もう病気はなおる見込みがない。あとにもどることはできないのだよ。うつろな灰色の顔をして、せかせか動き回るばかりで、灰色の男とそっくりになってしまう。そうだよ、こうなったら灰色の男そのものだよ。この病気の名前はね、致死的退屈症というのだ。』(321~2頁)

現在、人間は、灰色の男から時間を借りなければなりません。借りるとき、どうしても灰色の男の毒が混ざってしまいます。それで、現在の人間は多かれ少なかれ致死的退屈症にかかる危険性があります。とくに若い人たちには注意が必要です。現代のこの病気については多くの症例があります。けれどもこれは別の物語、いつかまた、別のときに話しをしよう。

## 第4章 モモのイメージ

### 1) エンデの芸術論

『モモ』について、エンデ自身の語るところを聞いてみましょう。

『モモ』には、ともかく6年間費やしました。……なぜ私はこの作品を仕上げられなかったか?それはゲームのイメージが見つからなかったからです!『モモ』では、何度もそれを手にしたと思ったあと没にし、新たに考え出すといったことを続けながら、長いことかかつて、ようやくたどりついたのです。私は、なぜ時間泥棒が、あらゆる人から時間を盗めるのに、モモからはそれが出来なかったのか、その理由を見つけ出すことが、どうしてもできなかったのです。その理由は、形而上学的なものであつたり、倫理的なものであつたりしてはならない。そうしたものではありません。明快なゲームのルールが存在する必要があったのです。……ある朝、朝食をとっている時、突然、稲妻のようにひらめいたのです。時間は、それを節約して貯め込む人からだけ盗めるものだ。だって、時間を使う者は、時間を所有しませんからね。そうした者から時間を盗むことはできません。そして、このひらめきに伴って、時間貯蓄銀行のアイデアが浮かび、突然、物語全体が動き出したのです。こうして、私は、この物語を書き上げることが出来ました。登場人物は、すでに全員揃っていました。彼らは、出番を待つばかりになっていたのです。」(『ミヒャエル・エンデ』37~4頁)

エンデは別のところで「なにかある作品を書き始めると、最後がどうなるのか、私にはまるでわからない。私としては、そのときそのときに書きながら、決定するだけなのです。」(全集16、54頁)と述べています。はじめから構想があつて、その構想のもとに書いていくのではなく、書いているうちに物語のルールが出来てきて、そのルールを育てながら書いていくというのです。

『モモ』はエンデの本のなかでも社会批判が鋭く、反体制的な本だとみられていますが、こ

のような創作の方法に従っているエンデにすれば、社会批判が意図されていたわけではない、という事になります。

『モモ』で産業社会の諸問題が解決できるなんて思うのは、誤解もいいところだ。そんなつもりはなかったし、それを目標にしたわけでもない。むしろぼくは、今日の社会の姿を内面的な絵図に移しかえたかった。」(全集15、51頁)

「ぼくはね『モモ』を書くとき、そんな社会批判をやる気などこれっぽっちもなかった。いわば、自然のなりゆきとしてそうなっただけだ。当時ぼくは、純粋に詩的なことがらを気にしていた。それは、ぼくにとって、文化のコンセプト全体にかかわることなんだ。つまり、内部の世界を外部的世界にかえ、外部の世界を内部の世界にかえて、その結果、一方が他方のなかで再討議される。そうすることによってのみ、人間は自分の世界でくつろいだ気分になれる。そうでないとき、人間は、世界でよそ者のままだ。というわけで、ぼくにとっては、現代のぼくらの世界の外的なイメージを内的なイメージにかえることが、重要だったんだ。ほんとうにぼくは、中世の昔話の語り手がやったのとおなじことを、やりかたにすぎない。」(全集15、223頁)

エンデによれば、中世の昔話に出てくる森、王、魔女、狼は、語り手の周囲に現実存在したもののイメージで、詩的錬金術によってそれが内的イメージにかえられて心や精神に関する表現となったのです。そしてそうすることで、はじめて、世界は経験の対象となる、というのです。

「芸術は、つくることしかできない。説明はできない。美はつくることしかできない。説明することはできません。」(全集16、23頁)と述べているように、エンデは自分の作品を解説の対象としてではなく、経験すべき対象と考えているのです。

### 2) アンチ・ヒーロー

「ぼくは『モモ』で、あるひとつの人間の態

度、ひとつの人間像を描こうとした。お望みなら、アンチ・ヒーローといってもいい。」(全集 15、53 頁)

エンデにとって、外的イメージを内的イメージに転換しようとするとき、問題は、現代社会にあっては外的なものが内的なものとの結びつきを失っていることにありました。だから、現代社会に詩的錬金術をほどこすと「現代の恐ろしい姿が描かれてしま」(全集 15、224 頁)うことになったのです。そこで、エンデにとっては「反人間的なシステムを描くこと」(全集 15、52 頁)が重要になってきます。そうすると西部劇に出てくるような悪者が皆撃ち殺されて平和と秩序がもどってくるといった、ヒーローを採用できないというのです。

「工業技術というのは、人間の共同体が創造したものであり、多くの人々の共同体的作業や成果があるからこそ、自由に使いこなせるようになっている。そういうことは、たったひとりのモモにはできない相談だ。とはいえ、モモは、そういう共同体をつくる手伝いはできる。要するにぼくは、モモを灰色の紳士たちに対抗するタイプにしたかったんだ。とはいえ、ひとりぼっちで友だちがいないとき、モモはだれよりも無力だったからこそ、モモには友だちが必要なんだ。でないとモモは破滅する。」(全集 15、54 頁)

現代社会を内面化すると、それが人間の内的世界との結びつきが切れてしまっていることが判明します。だから、アンチ・ヒーローのモモは、灰色の男をただやっつけるだけでなく、新しい共同体の形成の必要性とその方向性をも示唆している、とエンデはかんがえているのです。そこでアンチ・ヒーローの性格も決まっていきます。

「たとえばぼくは、『モモ』で、まったく別なヒーローのタイプを発見しようとした。もっともそれは、すでに僕たちが話題にしているものだけだね。ふつうヒーローというのは、行動的な人間というのが相場だ。そこでぼくとしては、まさになんにもしないことによってヒーローであるようなヒーローをつくらうと思ったわ

け。……だからぼくは、人間の子どもにしようと思ったんだ。行為ではなく存在、たんにそこにいるだけでヒーローであるような子どもを描こうとした。モモはなんにもしない。一度ドアをあけ、一度ドアをしめる。モモがするのはそれだけだ。」(全集 15、56 頁)

新しい共同体をつくる手伝いをするモモ、モモは灰色の男たちに対抗します。でも「産業社会の諸問題の具体的なレディ・メイドの解決法を書き込んだ物語とか童話。そういうものを創作することは、はっきりいって無理だと思う。モデルとして解決法をしめすことすら無理だ。思うな。作家の使命は、社会意識をつくりだすことだけじゃないか。」(全集 15、57 頁)と考えているエンデにとって、物語としては「モモは、何か新しいことを世界にもちこむ。モモは人間たちに星の声をうたってきかせる。もしかしたら世界が変わるかもしれない。」(全集 15、59 頁)と述べるにとどめています。もちろんこの示唆は、具体的にはモモがマイスター・ホラに時間の花を見せてもらう場面が念頭におかれてなされています。

ところで、『モモ』についてのさまざまな読みがなされるなかで、文学には「時折には作家が大体気づいているよりも、はるかに深い意味のことが成り立つ。あとになってから、書いた文に何重もの意味があることがわかってくるのですが、たいしては、そうしようとするのではなくて、それは起きるのです。」(『ものがたりの余白』11 頁)とエンデは述べています。そして、「じぶんが書いた事を理解していない。というのは、作家にはよくあるのです。」(『ものがたりの余白』35 頁)とも語っています。主人公モモについても、エンデの考えとは別の意味があるに違いありません。

### 3) 社会の反逆

物語では、モモはみなし児で、どこからかやってきて、皆に世話をしてもらっている女の子ということになっています。この子の唯一といってもよい力は、人の話を聞くことができる、というものでした。そして、やがて大きく成長

することに備えて、ダブダブの男物の上衣を着ています。

モモが来て、話を聞いてくれることで、大人も子供も、それまではなかった経験をします。人々はそこで、人と人との楽しい触れあいを得たのでした。人々はモモに話を聞いてもらうことで、自分自身を取り戻すことができます。喧嘩をしていた大人は仲直り出来るし、子供たちは、モモがいるだけで楽しく遊べます。ここには人々が楽しく触れ合いながら暮らしている社会がイメージされています。

この社会は時間泥棒である灰色の男たちが登場し、彼らが大人を支配していくことで過去のものとなっていきます。灰色の男たちは、死んだものでいのちをつないでいて、人間の姿をしてはいるが人間ではなく、本当はいないはずのものです。人間がそういうものの発生をゆるす条件を作り出していることで、この世に登場したものでした。

ここには、産業資本のイメージが見事に描かれています。灰色の男たちの本性がこういうものですから、人間はその気になれば彼らをかたずけてしまうことが出来るのですが、しかし、資本は人間の意志を支配していて、人間にとっては資本の意志が自分の自発的意志としか思えないので、なかなかそれをかたずける気になれません。

そのうち灰色の男たちは人間の時間を一人一人から盗むのではなく、まるごと得ることを画策しはじめます。この状態は人間の社会の終末を意味しています。この極限に直面して、モモは人間以外のものの力を借りて、灰色の男を消滅させるのでした。

物語のなかで、マイスター・ホラは、灰色の男たちが人間の姿をしてはいるが、人間ではないことを暴きました。実はモモも、人の話の上手な聞き手でした。このときモモは他者の姿を映す鏡となっています。この鏡とは、実は社会のことですが、それは見えないものなので、モモの仕事は誰にも気づかれずにすませることが出来ます。

またモモは、皆に世話をされている子供とし

て描かれています。しかし人間が社会をつくれれば、人間は自分自身だけでなく、社会の世話を共同でしなければなりません。

さらに、モモは、自分の年齢を 100 才か 102 才かと思っていました。これは近代市民社会の年齢とかわりません。そして、近代市民社会は 100 才になってもまだ子供で、社会の構成員である人間と同じ年齢の灰色の男たちの時間貯蓄銀行のいいなりになっているのです。

だから、モモの灰色の男たちとの闘いは、人間よりも社会の方が先に資本に反逆したということでした。このモモの闘いは実際には敗北したのですが、それ以降社会はどうなったのでしょうか。けれどもこれはまた別の物語、いつかまた別のときに話すとしよう。

## 第 5 章 意識の跳躍

### 1) 二元論にたつ量的思考

エンデは「灰色の男たちは、ほかでもない、ものごとをひたすら量としてとらえてしまう思考を代表しているわけだ。」(全集 15、60 頁)と述べています。実際に物語のなかで、灰色の男たちは人間の生活のすべてを時間という量で計ります。全てが一つの価値で計られることで、他の質は全て無価値とされたのでした。

エンデはこの量としてとらえる思考の始まりを、16 世紀頃、ジョルダナーノ・ブルーノやガリレオ・ガリレイやニュートンなどとともにほじまった思考形態に求めています。「その種の思考は、単一の世界をひきさいて、客観的現実と主観的内面とにわけた」(全集 15、39 頁)のでした。

この思考形態は、発達に発達を続け、とうとう終点にきて、死んでしまったのではないか、そして、「一般に考えられてくるよりはるかに深いところで進行している意識の変化」(全集 15、39 頁)は、新しい思考を生み出すのではないか、ということに、エンデは注目しています。「作家の使命は、社会意識をつくりだすことだけ」(全集 15、53 頁)だというエンデの

主張は、この想いかかわっていたのです。

単一の世界をひきさいて、客観的現実と主観の内面とを分けてしまうと、「人間の意識なんかなくたって事実の世界は存在するかのよう」(全集 15、39 頁) 思われてしまいます。だから、この種の思考が登場した当時は「あたかも人間の意識などまったく存在しないかのよう」にやってみよう。そして事物が『それ自体』としてどうあるかを調べよう(全集 15、39 頁)と考えられていたのです。

エンデはこの種の思考を支えているこの留保条件もある種の人間の意識、つまり、「人間の意識というものを排除して考えるなにか」(全集 15、40 頁)が必要だと考え、そして「16 世紀はじめには、世界を客観と主観に二分するのは、なにか特定の研究をすすめるためのまったくのフィクションだということが、まだ皆の意識にもこっていた」(全集 15、40 頁)と主張しています。

「ところが時代がすすむにつれて、この二元論はフィクションにもとづいているという点が、すっかりわすれられてしまったようだ。今日ではほとんどの人が、客観的な世界と主観的な世界があるということを信じて疑わない。それどころか事態はもっと深刻で、『客観的』という言葉が『正しい』の同義語にされてしまっているんだ。」(全集 15、40 頁)

さらにエンデは「客観的」という言葉が「正しい」の同義語にされていることの裏側に「主観的」というレッテルが「錯覚」の同義語になっていると指摘しています。それで「ぼくたちの思考は袋小路にはいりこんでいて、認識の発展力などいっさい望めない状態」(全集 15、40 頁)になっているというのです。

## 2) 客観・主観、二元論の克服

このように思考が袋小路に入っていることで、現実認識がはなはだしく間違っている現状に対し、エンデは次のように提言しています。

「このあやまった概念を克服できる方法は、ぼくの場合は、ひとつしかない。つまり、二元論を捨てて、フィクションをフィクションとし

て再確認する。それから人間の意識と世界とがわがちがたくひとつに結びついており、両者は一枚のコインの裏表である、ということを理解する。それしか方法はないんだ。どんな認識だって、認識する意識というものを前提としている。いいかえれば、主観が前提にある。そのことがわかれば、マテリアリストになんか、なれないね。」(全集 15、40~1 頁)

二元論を捨てるのが、今日問われている、ということは、ごく普通の意識になっています。問題はどのように捨てるか、捨てるか、エンデは「人間の意識と世界とがわがちがたくひとつに結びついて」いること、認識の際には「主観が前提にある」ということで、二元論を捨てますから、マテリアリズム(唯物論)批判へと向います。でも「自然にかえれ」という主張には同意してませんから、エンデのいうマテリアリズムつまり「量的思考一本槍による発達というものを後退させるべき」(全集 15、47 頁)とは考えていず、「問題はそれを越えること」(全集 15、47 頁)と捉えられています。

そうだとすると、エンデの捨てる方には少し気になるところがあります。ヘーゲルは、意識を自我と対象との関係と捉えましたが、この見地からの二元論の克服の方が、エンデの意に添っていると思われれます。エンデの場合、客観に自然を、主観に認識主体をあてはめたので、単一の世界を考へるときに、認識主体である主観を前提に置いてしまっています。でも、ヘーゲルのように、主観を自我と意識とに区分すれば人間の認識を意識の形態として自我から相対的に独立させることが可能となり、客観と主観を意識において統一するものとして、人間の認識があることが明らかとなります。そうすると、マテリアリズムが物質を意識から独立した存在としてみることを否定する理由はなくなります。人間が客観的なものと主張している場合も必ず客観的なものについての意識に他なりませんから、そのことを理由としてマテリアリズムを否定しても始まらないのです。

## 3) 質をどう捉えるか

二元論のエンデによる捨てる方に異論はありますが、しかし、芸術家としてのエンデによる質についての考えはすばらしいものです。

「なにせ質というものは、量的な思考では捉え切れないからね。質というものは、たしかに測ることはできないが、にもかかわらず、存在はしている。しかし、質の知覚は、知覚する人と切り離す事ができない。とすると外もなければ内もないということになる。

質という概念を、ぼくはいまこんなふうには理解しているんだ。つまり、人間が世界にかんして最初にもつ根源的な体験である、とね。質はいつもいちばん最初に体験される。質の体験はあらゆる思考に先行するものだ。量的思考は、ずっとあとになってから登場する。」(全集 15、42 頁)

エンデはここで美について「美の知覚は、知覚する人と切り離す事が出来ない。とすると外も内もないということになる。」と述べています。ここでエンデは、芸術作品と美の知覚と知覚する人という三つの区分をした上で、外と内が美の知覚において統一されていることを洞察しています。主観と意識とはちゃんと区別されているのです。

ところで質という根源的な体験が、何故今日では顧みられなくなったのか、ということについて、エンデはハイゼンベルグの論文を引いて次のように述べています。

「ゲーテは、自然における質というものを『原現象』と呼んでいた。彼の自然科学は、そういう自然における質を認識しようとした反ニュートン的な自然科学なんだ。で、ハイゼンベルグによると、ゲーテの自然科学がニュートンの理論と競争して敗れたのは、それが正しくなかったからではない。むしろゲーテの自然科学は少なくともニュートン理論と同じ位には正しく、ことによると『もっと正しい』ものですらあったかも知れない。しかしそれは応用のきかないものだった。ゲーテの自然科学をもちいてもなにも『つくる』ことができなかった。それとは

逆に、ニュートンの自然科学理論からは、近代テクノロジーのすべてが生まれた。その理論によって、何かを『つくる』ことができたからだ。」(全集 15、44 頁)

つくる事が出来る自然科学が競争で勝った理由は、資本主義の発達による工業技術の発展があります。もし近代的な工業技術を必要としないような生産の仕組であれば、どうなっていたかわかりません。でもエンデは、近代テクノロジーを否定しはしません。「発展があやまりかどうか、それは問題じゃない。それは歴史的な事実なんだよ。歴史的な事実というものは、まさに事実しかないわけで、正しくもなければ、まちがいでない。」(全集 15、56 頁)このような見地から、エンデは「工業技術をそなえた未来の文化の姿」(全集 15、47 頁)を求めています。

「現代の思考を一次元的なものにしたプロセスの正体がきちんとわかれば、もうそれだけで、新しい思考が生まれてくるものかどうか。ぼくにはわからない。ただね、一種の突然変異が思考におきなければならない、『意識の跳躍』が必要だ、とは考えている。」(全集 15、47 頁)

この意識の跳躍を求めて、エンデは『モモ』でどのような仕掛けをしているのでしょうか。

## 4) 新しい思考

モモは人の話を聞くのが上手でした。しかしそれだけではありません。

「モモは犬や猫にも、コオロギやヒキガエルにも、いやそればかりか、雨や、木々にざわめく風にまで、耳をかたむけました。するとどんなものでも、それぞれのことばでモモに話しかけてくるのです。」(『モモ』29 頁)

人間以外のそれぞれのものが、それぞれのことばでモモに話しかけてきます。もちろん、それぞれのことばの意味がわからなければ、それは音であり、音楽です。また、音だけでなく仕ぐさや色や香りも、ことばとなります。人間以外のものが話しかけてきている、このことの本当の意味を、モモは時間の国で、時間の花を見る事で、悟ります。「じっと耳をかたむけてい



ると、だんだんはつきり、ひとつひとつの音がきき分けられるようになってきました。でもそれは人間の声ではなく、金や銀や、その他あらゆる種類の金属がうたっているようなひびきです。するとこんどは、すぐそれについて、まったくちがう種類の声、想像もおよぼぬとおくから言いあらわしがたい力強さをもってひびいてくる声が聞こえてきました。それはだんだんはつきりしてきて、やがてことばが聞き取れるようになりました。いちども聞いたことのないふしぎなことばですが、それでもモモにはわかります。それは、太陽と月とあらゆる惑星と恒星が、じぶんたちそれぞれのほんとうの名前をつけていることばでした。そしてそれらの名前こそ、二つの〈時間の花〉のひとつひとつを誕生させ、ふたたび消え去らせるために、星々がなにをやり、どのように力をおよぼし合っているかを知る鍵となっているのです。

そのとき、とつぜんモモはさとりました。これらのことばはすべて、彼女にかたりかけられたものなのです！全世界が、はるかかなたの星々にいたるまで、たったひとつの巨大な顔となって彼女のほうをむき、じっと見詰めて話しかけているのです！

おそろしさよりももっと大きななにかが、彼女を圧倒しました。」(『モモ』217~8頁)

この時間の花についてのファンタジーは、多様な解釈が可能です。げんに、シュタイナー流の神秘主義的解釈が横行しています。しかし、意識の跳躍が必要だと考え、社会意識をつくりだすことを作家の使命と考えているエンデにとって、神秘主義的解釈は似つかわしいものではないでしょう。

まさしく、エンデは、時間の花を質を経験する場として設定しています。ファンタジーとして描かれている質を知覚する事で、この知覚が知覚する人とは切はなし得ない事を示しているし、また、ファンタジーをフィクションとして再認識することで、人間の意識と世界とがわかちがたくひとつに結びついてことを示そうとしているのです。そして、このような新しい思考でもう一度、世界を眺めてみる、そうすると灰

色の男の声を相対化することができるでしょう。エンデはファンタジーに託して、このようなメッセージを送っているのです。

## 第6章 社会有機体

### 1) 「政治上のユートピア」

社会民主党の政治家、エアハルト・エプラーと演劇女優のハンネ・テヒルとエンデとの対談『オリブの森で語りあう』で、エンデは、スイスでの経営者たちとの会合の様相から話をめぐっています。会合の主催者はエンデに『モモ』の一節を朗読する事と、自由な議論のコーディネートを期待したのでした。

エンデは「ポジティブなユートピア」を話せる機会になればと招待に応じ、床屋のフィージ氏の節を朗読し、未来の社会についての自由な議論を呼びかけましたが、この試みはうまくいきませんでした。この体験を踏まえ、エンデは対談のテーマを「とにかく暮らしてみたいと思えるようなポジティブな世界像をつくりあげる」(全集 15、20 頁)ことにしようと提案しています。

長い導入部の対話のあと、エンデは、政治上のユートピアについて語り始めます。フランス革命の三つの理念、自由、平等、友愛、これについて 20 世紀の誰もが実現したいという想いを持っているが、この三つの理念をどう捉えるかについて次のように述べています。

「ところでこの三つの理想は、まったく異なつた『生の領域』に関係しているのだが、これまではみんないつも、この三つをひとつの鍋にぶちこもうとしてきた。統一国家をつくって、そこで三つの理想を可能なかぎり実現しようと考えていたわけだ。そのうえに、まったく気づかなかったこと、あるいは気づこうとしなかったことがある。それはね、国の使命は理想を三つとも実現する事じゃなくて、ひとつだけ実現すればいいってことなんだ。使命から定義すれば、国とは、法律をつくり適用しなければならない組織なんだ。そしてまた、国という組織はたく

さんの国民とかかわっているのだから、法律をみんなのものにしなければならぬ。というわけで、国は、三つのうちの二番目の理想、つまり、平等しか実現できないんだ。おまけにその『平等』は、ほんらいの意味、つまり、『法の前での平等』ってことにすぎない。あるいはまた、立法にかんする平等といつてもいい。」(全集 15、63~4 頁)

たしかに、19 世紀と 20 世紀の社会運動は、自由、平等、友愛という三つの理想の実現を国に求めてきました。それは、政治運動中心の社会運動でして、労働者が資本家階級の国家権力を打倒し、新しい国家をつくれれば理想的社会への道が開かれるというように考えられてきました。

このような支配的な考え方に反対して、エンデは、国家が実現できることは、法のまえでの平等だけだと述べています。そして、自由は人間の精神にあてはまることであり、友愛は経済の掟である、というのです。

エンデは、現在の学校教育のシステムが全国共通なものに画一化されていっていること、そして、国が教育を管理する事に反対し、次のように述べています。

『精神』にかんしては、自由の理想が無制限にあてはまる。『精神』は、できるだけ束縛されていないことが必要だし、『精神』は各人各様の能力におうじて、それぞれ独自のかたちで形成されなければならない。」(全集 15、65 頁)

また、経済については、需要と供給の自由なゲームを通用させようとする自由主義経済と、他方で国が経済を管理する場合をともに批判したうえで、「『経済』は、自前の機関をつくりださなくちゃならない。国には従属しないものをね。たとえば、独立した消費共同体とか生産共同体といったような機関だ」(全集 15、66 頁)と述べています。

### 2) 文化の捉え方

このエンデの「政治上のユートピア」は基本的に了解できます。この間の古い政治運動に代わる新しい社会運動の登場は、エンデの考えの

正しさを実証しています。三つの理想を全て国家に期待してきましたが、国家が実現できるのは政治的自由(これは経済的な不自由とセットになっています)と法のまえでの平等と単なる言葉の上での友愛でした。

エンデは、精神と国(政治)と経済の三つの領域を区分した上で、これを統合した社会有機体を文化構成体として捉えます。「社会有機体というのは、総合的な文化構成体だと考えればいい。国ですらこの文化構成体の一領域にすぎない。もちろん、全体が静止した三つの部分からなっていると考えるはいけぬ。三つの社会平面のあいだに持続しているダイナミックなプロセス、それを全体と考えたい。この場合、文化は国とか政治の下位部門じゃなくて、逆にね、政治の方が総合文化の一部分なんだ。この総合文化に属しているのが、『経済』であり、『精神』であり、『国』つまり、まさに厳密な意味での『政治』である。」(全集 15、66~7 頁)

つまり、エンデによれば、人間は「精神」においてだけ、あるいは「経済」においてだけ存在しているわけではなく、「ぼくたちはみんな、三つの領域すべてにかかわっている」(全集 15、68 頁) わけで、スイスの経営者たちと討論したかったのも、この問題だったのでしょう。経営者たちが、エンデの呼びかけにのってこなかった思想上の問題点について、エンデは次のように述べています。

「経済生活をひたすら経済の視点からだけながめる。そういう態度はまちがっているんじゃないか。まさにそれが問題なんだ。もしかしたら、その態度は全面的にまちがっているかもしれない。つまり、経済というのは文化の問題として理解すべきだ、と思えるからなんだがね。経済のことがらを調整するものをぼくたちは、まったく別な生活領域からみつけだすべきじゃないだろうか。」(全集 15、31 頁)

エンデは、経済生活が自律した現象であつて、その現象がひたすら独自の法則にしたがっているだけ、と考えれば、人間の生活の他の領域とまったく無関係にされてしまうと主張しています。実際に自律しているのは灰色の男に象徴さ

れた資本の運動です。ところが資本は人間の意志を支配し、人間にとってはその命令は人間の自発的決意のように思われてしまいます。このことがわかっているエンデにとって、経営者の「悪意なんていうのは問題にならない、という感じがする」(全集 15、28 頁) のです。「彼らはメリーゴーランドに乗って、前にすわっている人を追っかけている。回転はますます早くなるばかり。「まさにこれは、競争原理にもとづいた経済の本質なんだ。だれひとり、このメリーゴーランドから降りる事ができない。たとえ降りたいと思ったとしてもね。ぐるぐる回りながら、お互いに敵となって、追いかける。市場のことが気がかりだからね。」(全集 15、28 頁)

こうして、エンデは経済を調整する力は、どこか別の方面からやってこなければならぬと考へ、それを文化に求めたのでした。ここでの文化とは、文化構成体のことであり、ライフスタイルの事でした。

「まだはっきりとは口にされていないが、若い世代のほんとうの関心というのは、自分たちはもういちど文化というものをもつんだ、というところにあるんじゃないかな。ここで、ぼくのいっている文化というのは、あの典型的なブルジョアの教義主義的な概念とはちがうものだけだね。……ぼくのいう文化は、むしろね、ライフスタイル、価値観——こういってよければ——生活態度の共通性のことだ。この共通性は、時代とか社会がもっているもので、この共通性において、時代や社会が自分を再発見し、自分を表現したりもする。」(全集 15、37~8 頁)

エンデによれば、この文化は自然科学的な思考からは生まれてこず、意識の変化を必要とするものでした。この意識の変化をたどってきて、「政治上のユートピア」を踏まえると、経済を調整する力を文化に求めようとしているエンデの考へが、非常にすぐれたものであることがわかります。

### 3) シュタイナーとのかかわり

エンデは、三つの理想をそれぞれ別の領域の問題と捉える社会有機体の考へ方が依拠しているものが、シュタイナーの社会有機体三層化運動である事を明言しています(全集 15、66 頁)。また、エンデが、シュタイナーの本を座右の書にしていたという報告もあり、エンデをシュタイナーの神秘学とのかかわりで理解しようという試みが後をたたないのです。

しかし、人智学出版社から出ている『ミヒャエル・エンデ——ファンタジー神話と現代』(樋口純明編、1986 年)によれば、エンデは、ドイツの人智学側から自分の作品について、これまで何らこれといった賛意を得ていないと書いています。さらに、エンデは次のように述べています。

「それは私には正統なアントロポゾーフではないし、人智学の学習の成果を、全く自己流に練り直そうとしていますし、その際、何が正統で、何が正統でないか、などということを感じていないからでしょう。」

人智学の古めかしい決まり文句、といったものがあるんじゃないですか？それにまた、自由について、実は多くのことが語られながら——自由の実現が、これほどまで少ない協会も他に存在しません。この協会では、ルドルフ・シュタイナーが語ったこと、あるいは、マリー・シュタイナー夫人、さらには、シュテッフェンが語った事すら、どんなことでも小心翼翼とまさしく一字一句違わないように守られています。誰かが自主的に何かをしようとすると、すぐにこう言われる。いや、だめだ、そんなことは本に載っていない。私の考へでは、本来、人智学によって別の形で展開されるべきだった多くのことが、小心で俗物的な模倣に墮し、ごく短期間のうちに、硬直化してしまったのは、このことが原因なのです。」(『ミヒャエル・エンデ』57~8 頁)

このエンデと人智学協会との違和感は、編者の樋口純明によれば、自由についての把握の違いにあるとされています。それは、空想力と想

像力との違いであるというのです。樋口によれば、「シュタイナーの<自由>において、人は拘束や束縛から自由になると同時に、倫理的想像力を所有することになるのである。倫理的想像力とは、パターン化し固定化した倫理的行為ではなく、そのつど具体的に、人や社会のために役立つ行為を、自由に思い浮かべる力のことである。」(同、8 頁)が、これに対して、エンデの空想力には「善からも自由であろうとする」アナーキーさがあるというのです。この考へ方は、ドイツの人智学協会の考へ方でもあるようです。

### 4) シュタイナーとのちがひ

ところで、社会有機体説の問題に立ち帰れば、人智学の三層化論の専門家であるブリュルが『オリーブの森で語りあう』の社会有機体論を読んだとき赤面したと述べています。(同、89、186 頁)樋口は、ブリュルが赤面した理由を、そこにエンデの空想的自由を見たからだと推測しています。

はたしてそうでしょうか。実はエンデはこの「政治上のユートピア」を語ったところで、シュタイナーの考へとは全くあい入れない内容を提出しているのです。エンデは一貫して経済を何とかしないとどうしようもないと考えています。そして、社会有機体について述べた後、次のように付け加えています。

「資本主義『経済』を前提にしたままだと当然うなるにちがいない。『経済』の基盤を別な場所に移しもしないで、本当に『精神』を解放することはできない。ところで、エアハルト、きみはすでに経済の影響を問題にしたけれども、しかしね、まさしく現代のシステムだから経済の影響が圧倒的なんだよ。」(全集、15、71 頁)

他方、シュタイナーはどうでしょうか。神秘学の提唱者として、霊の世界こととか、教育とか、農業について語っているシュタイナーは有名ですが、彼も、第一次世界大戦後のドイツの革命期に、積極的にプロレタリアートに働きかけ、一連の著作(講演集)をものにしていきます。シュタイナー選集、第 9 巻と第 11 巻に収めら

れているそれらの講演では、当時の階級闘争の担い手であったマルクス主義の諸潮流の政治思想に対する批判が繰り返され、自らの積極的な提言がなされています。

その批判の要は、マルクス主義の階級闘争の理論には精神生活への考察が欠落しているとみなし、そして、この精神生活を自由にしていくことから出発して、社会有機体を三層化させていけば、未来社会が形成されると説いているのです。

だから、シュタイナーは「経済過程を変化させて、その中で人間の労働力が正当な在り方をするようにしようとしても無駄である」(『シュタイナー選集』11 巻、53 頁)と主張し、「本書で主張されている社会概念の正しさを確信できた人が、この概念の普及に協力することである。この概念が理解されれば、現在の状態を弊害のない状態へ転化させる可能性に希望をつなくことができる。そしてこの希望だけが、本当に健全な社会を発展させることができるのである」(同、112 頁)と説いています。

つまり、シュタイナーは、当時の社会システムを変革する事を否定したのです。このことは、「本書の立場は、今あるものを破壊することで、すでにこれまで生じたよりもっと良い未来を実現させようとは望まない。大切なのは、われわれの理念を既存のものの上に実現していく作業のなかで、不健全なものを廃止していくことなのである」(同、113 頁)と述べられていることから明らかです。

エンデは、先の精神の解放論に続き、「私欲がない」精神状態をどう作り出すかというテヒルの間に対して、次のように述べています。

「その方法は『経済』から資本主義を、そのガン腫瘍ともども、えぐり出すことだ。国の資本主義も、プライベートな資本主義もみんなね。そうすれば、『私欲がないこと』は特別に犠牲を決心しなければならない問題ではなく、あたりまえのことになるだろう。そうすれば、第三の理想、つまり『経済』における友愛へも、大きく一歩近づくことになるだろう。」(全集 15、74 頁)

シュタイナーは、当時の経済システムには手をふれず、資本家や労働者、政治家や教育者が人智学を信奉し、社会有機体三層化の概念に従えば、世の中はおのづからうまく行く、というものですから、経済の変革を精神の変革の条件とみるエンデの考えとは全然異なっています。同じ社会有機体三層化の立場に立ってはいても、問題解決の方法で、二人は違っていたのです。シュタイナーの忠実な弟子たるブリュルが「赤面した」のは明らかにこの方法の相異を知ったからでしょう。結局、エンデは、シュタイナーとは別の「政治的ユートピア」を語ったのでした。

## 第7章 子安美智子の解釈

### 1) 子安によるシュタイナーの世界

『モモ』をシュタイナーの世界観との結びつきで読もうとする試みは沢山あります。その代表的なものが、子安美智子『モモを読む』(学陽書房女性文庫)です。この本に則して、エンデとシュタイナーとがどのように結びつけられているかを見てみましょう。

子安は、「じつは『モモ』をはじめ読んでとき、深い水底でつながるシュタイナーの世界があまりにもはっきり見えたことに、私は衝撃をうけたのでした。」(10頁)と述べています。そのシュタイナーの世界とは、子安によれば「アントロポゾフィー(シュタイナーの人智学)にはつまり非常に内的な秘教の面と明白に表れる実践面とが、分ちがたく一体化している特徴があります。それは、目に見える物質界の背後に物質界と同じ客観性をもった精神(ガイスト)の世界があるという世界観からくるのです。物質だけが確かで、精神すらも物質に由来する産物だとみなす唯物論は、絶対にまちがっている。」(14頁)というもので、そして、「その認識をより確かなものとするために、一方で内的な修行の道を歩む」(14頁)ことが必要だ、というのです。

精神が物質に由来する産物だということを否

定するということは、どのような意味でしょうか。子安によれば、人間は三重の存在であり、それは、身体、魂、精神(ガイスト)で、この三者の働きは異なり、人間は三つの世界の住人だ、というのです。つまり、「身体界、魂界、精神界の三つがあつて、それぞれに住んでいる。」(43頁)そして、この精神界とは、身体界で死んだ人間が生を始めるところで、この精神界での生がしばらく続くと、人間は再び地上の身体界におりてきて、転生を無数に繰り返しているのだ(45頁)というのです。

「身体界と精神界、言うなれば、物理的空間と非物理的空間とを、生一死の繰り返して行ききしている人間、いや正確には人間の核とっていいもの、それを『自我』と呼んでおきます。」(46頁)

この地球に人間の自我が降りてくる前はどうかにかについて、シュタイナーは述べていますが、それについてはふれず、子安は「今回の人生がはじめてで一回きりのものではないことは確かだ」(46頁)という認識に近づくことが大切だ、と述べています。つまり、精神界の物質界からの独立ということは、転生の認識に含まれているのです。

こうして、子安のイメージするシュタイナーの世界がいま開けてきます。それは、人間は転生するという認識にいたる修行で自分を変えていく、ということに他なりません。そして、『モモ』がこの見地から解釈されていきます。

### 2) 少女モモのリアリティ

子安は、モモのリアリティを考えるときに、「あいての話を聞く」力を手がかりに、この力は修行のたまものであり、そして、モモは読者の外に居るのではなく、「私の内に生きている、目に見えぬ存在の姿」(21頁)と捉えていきます。

だから読者に対して、「モモのようになるのでも、まわりにモモをほしがらなくても、私の内なるモモを確かめる努力をする」(24頁)ことを要求し、聞く力をつけていくシュタイナーの修行を要請していきます。このように子安

は、物語をすべて内心に取込んで、物語を自分の内心の進展として読むことを提案しています。

しかしこれでは、せつかく身体界と精神界とを分けたシュタイナーの努力を無に帰してしまっています。唯物論は、精神を物質の産物であるとみなし、転生を否定しますが、しかし、精神が物質界の存在様式とは別種の存在様式をもつことを否定しはしません。もちろん、精神、つまりは人間の社会的意識の諸形態についての解明は全く不十分であり、だから修行によってしか認識しえない、といった主張も存立しうるのですが、しかし、精神界が身体界から独立したものだということなら、『モモ』の世界は「私の内なるモモ」に解消しえないものだ、ということになってしまいます。

子安の解釈とは逆に、モモのリアリティは、モモが全ての人間が持っている「聞く力」の化身となっているところにあり、エンデは、個々人の持つこの力を増幅させてモモの力とすることで、読者の共感を得たのではないのでしょうか。そして、この聞く力は、同時に対話論ともなっています。モモは相手の話を聞く事で、自分自身を相手を書し出す鏡としたのです。誰でもこのような聞き手がいればいい考えも浮かぶし、自分が何者であるかも理解できていくでしょう。

実際、エンデの聞く力についての説明と、シュタイナーの修行との間には発想の違いがあります。それは、子安がシュタイナーとの共通性として示している、二人の言葉を比較すれば明らかとなります。

エンデの言葉「モモが身につけていたような、ひとの話に聞き入る力、その秘密は、自分をまったくからにすることにあります。それによって、自身のなかに他者を迎える空席ができます。そしてその相手をこの空間に入れてあげます。モモは、そうやって彼女のなかにはいってくるものが、良いものか悪いものかと問うことをしません。」(25頁)

シュタイナーの言葉「こうして人間は、自分をまったく無にして他者の言葉を聞けるようになる。自分のこと、自分の意見や感じ方を完全に排除して、自分と正反対の意見が出されると

き、いや『およそひどいこと』がまかり通るときですら、没批判的に聞き入る練習をしていくと、しだいに、そのひとは他者の本質と完全に融けあい、すっかりこれと合体する。相手の言葉を聞くことによって、相手の魂のなかには入りこむ。」(25頁)

シュタイナーの聞く力を得るための修行は、他者と自分の合体をめざしていますが、エンデの場合は、相手を自分の中に入れてあげること、つまりは、自分が相手の鏡になることです。シュタイナーの場合、結局は他者の他者性を認めない独我論の道に行き、社会は否定されますが、エンデの場合、他者を他者と認める社会性があります。

実際に子安は「自己を他者として観察する」というシュタイナーの修行について述べているところで、シュタイナーが「自分の体験や行動には自分がまきこまれている。それに対して他人の体験や行動のことは、だれもがただ眺めるだけでしかない」(34頁)と述べているところを引用していますが、この言葉はシュタイナーが、他者を自己との関係において捉えてはいないことを示しており、人間の社会性を把握する視点を欠落させていることを示しています。だからまづもって、個人の修行が大切だとされてしまうのです。

さて、モモのリアリティに帰りましょう。子安はモモが登場した場面をふりかえってみて、自分にはモモが生まれ代わってきた自我としか思えないと述べています。これはモモを人間の内心にとりこんでいった結果です。

しかし逆に、モモを諸個人の聞く力の外化したものであり、その化身と見ればどうなるでしょうか。その場合、モモは諸個人の話を聞く事で、諸個人を書し出す鏡の役割をはたしていることになり。この意味ではモモは社会的な鏡であり、一般的な類的な力の担い手でしょう。モモの現身はたとえ少女であったとしても、その本性は少女を越えた存在です。エンデは、モモを超越的な身体として描くことで、社会の構造を提示しているのではないのでしょうか。

### 3) エンデとシュタイナー

子安の解釈の問題点は、モモを内面にとり込もうとする他の、三層化を、社会有機体の三層化の説明ではなくて、転生の話にひきつけて説明してしまったところにもあります。

『闇の考古学』を読めば、確かにエンデは、転生という考え方について肯定しています(全集 17、150 頁)。しかし、このような考えは、例えば「精霊」というものについてのボイスとの対話で「みんながそういうものを認めるなんて考えられない」(全集 16、106 頁)と述べ、それに対して、ボイスが精霊についても科学と同じような精確さで認識できると述べたとき「どうやら私たちは、すっかり秘教的なものの深みにはいりこんでしまったようです」(全集 16、108 頁)と述べて、ボイスと距離をおこうとしています。

そして、『闇の考古学』では、エンデは、転生の説明を「私は確信しています。転生を思い描くことは、すぐにもまた常識となるでしょう」(全集 17、152 頁)と述べたあと、クリッヒバウムに「いまそんなにはっきりおっしゃったことが、どうしてあなたの作品のなかでは、はっきり語られていないのでしょうか？」(全集 17、153 頁)と質問されると、次のように述べています。

「そのうち書くかも知れませんが、私はまだ死んでいませんから。これから書くことになるかも知れません。なぜなら、私が重視しているのは、自分の経験においてイメージに転換されるものだけしか書かないということだからです。しかしたとえば、次の本で、まさに来生と不死のテーマが登場することは、じゅうぶん考えられます。大いにありうる話です。

ただいつも避けたいと思っていることがあります。説明はしたくないのです。私は、本のなかで説明するつもりはありません。ある種の秘教的な小説では、たえず秘教が説明されています。そういうのを目にする、ぞっとします。それだけは避けたい」(全集 17、153 頁)

このように語っているエンデからすれば、

『モモ』の背後にある思想を、子安のように転生の思想と解釈し、それをシュタイナーの教義から説明することは、はっきり言って迷惑でしょう。

子安は、この本を書く前に、エンデと対談しています。子安はこの時にも何度か、エンデの作品をシュタイナーの人智学の見地から解釈しようとしています。その都度、エンデにたしなめられています。例えば、人間の意識の内側からの変容を試みることに、子安の場合、個人の意識の内面にむかいますが、エンデは次のように言っています。「今日、ふつう『自己認識』といわれるときには、たいていの人は、ああ、そう、自分の長所と短所を知ることだ、自身の性格の諸特徴を自覚することだ、と受け取るでしょう。そう、いろいろと心理学的に自分の内部をいじくりまわして、無意識の底にはいりこんでいく。そこに何か自分でも気づかない、かくれた欲望や衝動や、そのほか何やかやあることを引き出してくる。それでもってようやく自己を認識した、と思う。ちがいますか？ じつは、そんなことをしても何も認識できなかったのに、です。むしろ、人は終わりのない迷宮にはいりこむ一方です。……

そうではなくて、真の自己とは、自身の外にあるものです。私がこの箇所(『鏡のなかの鏡』第二話)でいっているのは、自身に課せられた課題をつかまえよ、ということなのです。自分の内部に課すのではなくて、課題は外なる生がもたらしてくれる。外からこちらに近づいてくる。これがほんとうにだいじなことです。やたらに自分のなかにもぐりこんで聞き耳をたてるのではなくて、世界が自分にさしだしてくるものに気づくこと」(『エンデと語る』朝日選書、42~3 頁)

このあと、エンデは、シュタイナーの他者論を引き合いに出していますが、先にみたように、他者性の理解で、両者は異なっています。エンデがイメージとして示している社会性をそれぞれが自分なりの物語りにしていくことが大切で、解釈や内面の追求はいらないのです。というのも、エンデがいうように、「真の自己とは、

自身の外にあるもの」ですから。

また、子安が『モモ』の時間の花のくぐり、「ここには、はっきり、人間は転生するという思想がのぞいていますね」(同、128 頁)と念をおしているのに対して、エンデは「ただ、誤解しないで下さい。私は決してその思想を知らせる意図で、あれを書いたのではありません」(同、128 頁)と応じています。

いずれにしても、エンデの作品をシュタイナーの思想で解釈し、シュタイナーの思想を説明しようとする子安の作業は、『モモ』の未読のノからこの作品を遠ざけることにしかならないでしょう。最後に子安との対談でエンデ自身が語ったシュタイナーとのかかわりを引用しておきましょう。

「私の世界観と私の作品、という関連でもう少し話をつづけるならば——たしかに私は三十

年以上もシュタイナーを読んでいます。けれども私はいつも、自分で正しいと感じたこと、自分の良心にしたがってこうあらねばならぬと思ったことをおこなってきました。ほかの人から指示されて行動することはありませんでした。私は自身の内なるコンパスにしかたがいません。そうしろ、しちやだめだ、等とコンパスが教えてくれます。だからシュタイナーから学んだことも、私はすべて私自身のやりかたに変容してしまうように努めてきたのです。」(同、130 頁)

シュタイナーとのかかわりで、エンデの作品を論じようとするなら、シュタイナーの思想から解釈するのではなくて、エンデがシュタイナーの思想をどのように変容させたか、ということの問題にしなければならぬのではないのでしょうか。

## 後記

今回も予定にはなかった「モモを読む」を掲載します。NHK 出版の『エンデの遺言』を読んだのがきっかけで、エンデの『モモ』を再読しました。あと、その他のエンデの作品や対談、若干の批評にあたってみて、『モモ』はベストセラーにはなったものの、エンデの評価については、きちんと議論されていないと感じました。

『エンデの遺言』は地域通貨の紹介もあり、それとして役に立つのですが、エンデのお金に対する考え方をゲゼルの老化する貨幣だけに関連づけたり、また、エンデの基本的思想をシュタイナーに求めたりしている点に違和感を覚え、エンデ自身に当たってみたのです。そうしてみると、もちろん従来の紹介や批評で明らかにされている内容が誤りというわけではないのですが、かといって、それがエンデの作品の核心を提示しているとは言えないことが判明したのです。

それで、従来明らかにされてはこなかったエンデの思想について、どうしても紹介しておきたい、という気持ちにかられ、『モモ』についてのはてしない物語を書き始めてしまいました。今回の分はその一部で、まだ続きがあります。

これまで文芸について論じたことはなかったのですが、エンデの『モモ』の場合、明確な政治的で文化的なアピールがありました。そして対談では、今日の社会システムをどのようにして変えていくか、ということについて情熱をもって語っています。これらを読んで、私は、エンデの思想を文化知への過渡と位置づけざるを得なくなりました。次回では、この点について明らかにしていきます。

